

龍樹に於ける物と相の問題 (上)

——(中論觀六種品の研究及解釋)——

稻 津 紀 三

第一章 問題の考察

一、存在(有)の立場と出來事(有爲行)の立場

經驗的世界は相によつて差別される個々の物から成り立つのであるが、我々が存在の立場にある限り、一つの物と他の物とが差別されるのは、唯だ相によつてのみ可能であり、それ以上に物と物との差別の根據を求めるとは出來ない。物と物とが差別されると云ふのは、一つの物が何かとして他と異つたその特質の規定されることであるが、存在の立場に於ては、物が何であるかと云ふことは如何なる相をもつて居るか云ふことによつて定まり、相が一物を規定する特質の全部になるのである。相は見られ触れられすがた、一般的に云へば、其れによつて物の何であるか知られるすがたであり、空間的事物の場合には色彩形状、乃至感觸が相である。それ

等の相を除いて別に物は無く、又それ等の相の凡てが數へられれば、「存在」としての物の特質の全部は盡きるのである。若し一つの物の特質を相以上に求めようとするならば、存在の立場から出來事の立場に移らなければならぬ。そして又其の立場に於て始めて物は、眞に他と共有しないそれ自身の個性を帯びて來るものと思はれる。出來事の立場から見るとき、物に就いて問題になるのは相ではなくして、因縁と生起である。其處では物が何であるかと云ふことは、如何なる相をもつかによつて規定されるのではなく、如何なる因縁によつて生じたかによつて規定される。「何であるか」と云ふ問を、一物が一物であつて他であり得ない其れの特質に於て何ものであるかと云ふ意味に解するならば、此の問は、物に就いて因縁生起をたづねなければ充分に満たされることは出來ない。因縁生起は物そのもの、持つ歴史であつて、又其の存在の理由である。今有る物の如何なる有り方——しかぐさの色をもつとか形をもつとか——も其の物がそう云ふ有り方に於て有つて、他の有り方をしないやうに規定されて來た因縁を指示するものでなければならぬ。單に有ると考へられた場合、一個の瓶は色形、乃至堅さ滑かさ等を相とする物であつて、又それだけで完結して居るのであるが、其れを生じたと考へる場合、生起の因縁として「泥團、轉繩、陶

師等]が考へられ、相の如何なる部分もそれ等の因縁によつて形づくられて居て、相は生起の因縁を具現するのである。相の上の一つの違ひは因縁の違ひを指示する。因縁は無限にたざることが出来るが、無限の因縁が働いて一つの物が生ずるとき、其の物の其の物たる相が定められる。この相を離れて物は無いが又、或る物の相に於て、其の相を定めるやうに働いた因縁は、其の相よりも一層眞實な實在でなければならぬ。随つて又物に於いて、眞に有るのは單なる相ではなくして、其の相を定めるやうに働いた因縁である。そして其れは物自身の生起の因縁に外ならない。生起の因縁によつて其の物の、他であり得ない個性が形づくられ、見られ觸れられる相は、その因縁を指示する限り一つの物を特質づけることが出来るのであらう。夫故一つの物の充分なる眞相を知るためには、かたち(相)を超えて因縁が問はれねばならぬ。かたちは物の有り方を示すが、有り方は生じ方によつて決定されて居る。因縁生起(縁起)を觀ることによつて、人は一物の個性に觸れると共に、その存在の理由——何故に其の相に於て有るか——を理解することが出来る。そして此のことは考察が物的なるものから心的なるものに移るとき特に重要な意味を持つのである。

存在の立場は相に於て物を見る立場であり、出來事の立場は縁起に於て物を見る

立場である。縁起に於て物を見るとは、言ひ換へれば、物を出來事の中に攝して見ることである。「物」と云ふ概念そのものが本此來「存在するもの」を意味し、それ自身の中に「有り」と云ふ賓辭を含むで居る。物とは「有るもの」である。然るに之に「生ずる」と云ふ賓辭を結び付けて「物が生ずる」と考へるときには、此の「生ずる」と云ふ賓辭の主語になつて居る「物」は、最早や「有るもの」ではなく、生ずるもの」と云ふ意味をそれ自身の中に含むで來なければならぬ。そして「生ずるもの」として「生ずる」と云ふ賓辭をそれ自身の中に含むのは「出來事」と云ふ概念である。有ると云ふ賓辭に於て考へられて居る限りが物であつて、それに「生ずる」と云ふ賓辭が與へられるとき、物は出來事になるのである。普通には「物が生ずる」と云はれるが、嚴密な概念では「物」は生ずることは出來ない。生ずること其のことが生ずるのである。「物」は已にそれ自身の中に有ると云ふ賓辭をもつもので、生ずると云ふ賓辭は如何なる場合にも「物」の概念に結び付くことは出來ない。物が因縁によつて生ずること其のこと、即ち因縁生起そのことのみが「生ずる」と云ふ賓辭をもつことが出來る。そして因縁生起そのことは、物ではなくして出來事である。それ故たとひ「物が生ずる」と言ひあらはされても、此の場合の主語である「物」はそれ自身の意味を失つて出來事を意味して居るのである。「生ずる」

と云ふ賓辭が結び付けられるときに於て、物は出來事に轉せられる。然し出來事は又物を離れてあるのではない。物が物として出來上ること以外に因縁生起の出來事は無く、それ故にこそ出來事は物を中に攝するのである。因縁生起は物に就いてたづねられるのであるが、因縁生起の間はれるとき、有ることは自ら生ずることの中に攝せられて來る。生ずることを見る立場出來事の立場は常に有ることを見る立場存、在の立場を超えて、其れを中に攝して居る。反對に、有ることを見る立場が生ずることを見る立場を攝することは出來ない。有ることは常に生ずることの中に攝せられることによつて、其の有ることの理由を得るのである。因縁生起、即ち縁起は必ず存在の縁起であつて、それ故に又存在の實相である。そして縁起から切り離されて見られたる單なる存在は空なるものである。それを實と見るのが有無の見である。それは生ずることを離れて有るものゝみを見る立場であり、その立場では物ののみ有つて因縁なく、世界は多様な差別の相を示現するのみで、統一ある全體を示現することが出來ない。有無の見を轉じて、存在を縁起に於て見ようとするのが龍樹の立場である。それは抑、佛敎々理の出發點を形づくつた特殊な思想的立場であるが、龍樹によつて始めてそれに哲學的な基礎が與へられる。縁起は現實のすがた

であり、そして論理的に、物に於て生起の成り立つことが證明されれば縁起の立場は確立される。それで如何にして物の生起が成り立ち得るか云ふことが、中論全體の中心問題になるのである。そしてその爲に、生起を成り立たせない場合の理由が先づ見出され、その理由を取り除くことによつて自ら生起の成立を基礎付けると云ふ方法が用ひられる。生起を不可能にする理由は、「物」の概念そのものの中に見出される。物の概念はそれ自身「有るもの」を意味して居て、物が物である限り「生ずる」と云ふ賓辭は結び付くことが出来ない。嚴密には「物が生ずる」とは云はれないで「生ずることが生ずる」と云はれねばならないと云ふことは、已に龍樹以前に有部の教學で注意されて居た。それは「本生」と「生」と云ふことである。或る物が生ずるときに二つの生起がある。一つは、生ずることそのことであり、二には、生ずることの生起である。前者は「本もとの生」、後者は「その本生の生即ち生生」で、此の二生によつて物の生起を説明しようとするのである。之は「物」の概念に直接「生ずる」と云ふ賓辭の結び付き得ない困難を救はうとしたものではないであらうか。然し「生ずることが生ずる」と云つても、この場合の主語にならぬ「生ずること」は、やはり物の生ずること以外ではあり得ないから、「物」の概念が残つて居る限り、困難を一つ先に送つたに過ぎない。それ故、

生起を成り立たせる爲には、批評は「物」の概念そのものに向かなければならない。物が物として成り立つて居る限りは、それは有るものであつて、生ずるものではない。物とは個々の存在するもの——瓶とか花とか——であるが、個々の存在を存在として成り立たせて居るものは何であるか。そう云ふものがあれば、其のものが因縁生起を不可能にする。それで存在物の觀念を成り立たせて居る所以のものを見出し、それが如何にして因縁生起を不可能にして居るかを批評することが問題になつて來るのである。

二、存在の立對に對する龍樹の批評

存在が存在として成り立つならば生起は不可能である。それで先づ存在が成り立つための根據が二方面から見出され、第一は「物自性を離れては存在は成立しない」と云ふ形で言ひあらはされる。即ち物自性と相可相とが存在成立の根據であつて、物自性の問題は有無品で取り扱はれ、相可相の問題は六種品で取り扱はれる。

第一、物自性は個々の存在する物の自性——瓶自性とか色自性とか——であつて、それは個々の物に就いて、この物又はかの物としてそれを他から區別せしめる本

質的性質であること、物の「存在」としての觀念を成り立たせて居る實體であること、の二つの性質をもつて居る。本質性と實體性とは物自性に屬する二つの根本的屬性である。凡そ個々の具體的なる物に就いては、それが何かとして他と差別された状態にあること、又「存在するもの」としては常に自己自身に同一なる状態にあること、即ち差別性 (pṛithaktra 異相) と同一性 (ekatva 一相) とが、物に就いて根本的に要求されて居る。そして此の要求を同時に満たすものが物自性であつて、物自性に屬する本質性と實體性との二つの屬性も、物に要求される差別性と同一性——存在するとは自己自身に同一であること云ふことで同一性は存在性であるが——とに應ずるものと考へられる。何かとして他との差別を成り立たせるのは、經驗的には相であつて物自性ではない。然し相と云ふ概念が已に何も、かの相と云ふ意味をそれ自身の中に持つて居て、相より前に此のもの、彼のもの、差別が已に成り立つて居るのである。或る本質を豫想しなければ相と云ふ概念そのものが成り立たない。相によつて物の差別が知られはするが、知られる前に差別は物自性によつて成り立つのである。然し斯かる事物の本質としての物自性は、如何なる性質的な規定もうけることが出来ない。物自性 (svabhāva) と云ふ概念は、言語上「それ自らにて (sva) 存在するも

の (Dhiva)』と云ふ意味をもつもので、唯だ「在る」とだけ言ひ得るが、それ以外の凡ての性質的規定から離れて居る、それ故にそれは「存在」の觀念それ自體であつて、物に於て其れの同一性——即ち存在性——の要求を満たす實體になつて来る。物自性に關する龍樹の根本的な定義は、作せられることなく、又他に因待せざるものと云ふことであつた。作せらるゝことなきとは、性質的に限定せられ得ないことを意味し、他に因待しないとは、其れの存在のために他に因り待つことを要しないこと、即ちそれ自身にて存在することを意味する。此の定義はそのまゝ物自性に於ける本質性と實體性との兩面を言ひあらはすものと考へることが出来るであらう。そして物自性が存在成立の根據になり、それによつて存在が存在として成り立つから、その立場では縁起が不可能になる。反對に縁起の成り立つためには物自性が取り除かれねばならない。物から物自性を否定して存在を因縁生起の出來事の中に攝することには、有無品の研究及び存在と行の稿に於て考察した。有ることを生ずることの中に攝し、單なる存在を「空し」とし、存在の實相を縁起に於て觀ようとするのが龍樹の根本的立場であが、その爲に却つて存在の立場そのものゝ哲學的な根據が見出されて來るのである。それは有部教義の中に漠然とした形で含まれて居たものが龍樹によつ

て充分な形に於て見出されたものと考へてよいであらう。

第二に相可相を離れては存在は成立しないとは如何なることであるか。その問題を六種品によつて考察しようと思ふ。

三、物相と可相

○何處に於ても何であつても無相の物(存在)はあることなし。(六種品第二偈)

○相と可相とを離れては實に物(存在)はあることなし。(第五偈)

物は何處に於てかあり何かとして、相によつて他と差別されて居るものである。そして「何處に於ても何であつても相の無い物はない」。物は必ず相をもてるものである。之を無相 (*a-taksana*) に對して有相 (*sa-taksana*) と云ふ。物は必ず有相である。相は「すがた」「かたち」を意味して物の屬性である。屬性の無いものとは何ものでもない物で、さう云ふものは考へられない。然し物と相とは直に同一ではない。相は、それによつて物の何であるかの知られる性質、或はそれに於て物の現はれて居る性質であるが。凡ての相を取り除いても尙後に眞に物を何かであらしめて居る本質が残る。物から色や形を取り除いて行くとき、物に於てその「存在する」と云はるべき部分を形づくる性質、即ち物自性が後に残り、之が相以上に加はることによつて物の

觀念が成立つて居る。それで具體的なる物は物自性と相との結合であつて、その結合の仕方が「相と可相」と云ふ關係である。本質である物自性は「在る」とは云はるゝが、それ自身は如何なるかたち「相」も持つて居ない。凡ての相を取り除いた後に考へられたものだからである。然し物の相は又必ず物自性のかたちでなければならぬ。物自性は全然相を離れたものではなく、何等かの仕方で相と關係しなければならぬ。即ち物自性は、それ自身は凡ての相を離れつゝ又必ず相によつて相せらるべきもの云ふ意味を與へられるのである。之が「可相」の概念である。相の原語「lakṣaṇa」は名詞であるが、それは文法上動詞「कृかたちづける、特性づける」の變化で「かたちづけるは、たらしきをもつもの」と云ふ意味を持ち、羅什は相と譯して居るが、異譯の燈論では「能相」と譯されて居る。そして可相の原語「कृ」は同じ動詞の未來義務分詞で言語上「未だ、かたちづけられずして而も當にかたちづけらるべき」と云ふ意味をもつ。此の語を異譯は「所相」と譯して居るがそれは適切でない。「所」は過去受動分詞を譯するときの助字として一般に用ひられるもので「所相」とすると「相せらるべき」ではなく「已に相せられたる」と云ふ意味が出て來る。已に相せられたときは相であつて物自性ではない。物自性は常に相せられてあらざるもので、唯だ「べき」として、相せられるこ

とを課せられて居るものである。相と物自性とは「相と可相」と云ふ關係に於て、即ち
 かたちづけることゝ、かたちづけられるべきことゝの關係に於て結合して居るのが具
 體的なる「物」であつて、「相と可相とを離れては物は實にあることがない」のである。然
 し此の場合物を物として存在の觀念を成り立たせて居るのは、可相としての物自性
 である。それで、相可相を離れては存在が成立しないと云ふ命題は、自ら「物自性を離
 れては存在が成立しない」と云ふ第一の命題の中に攝せられて來る。存在成立の根
 據には唯だ物自性が考へられ、ばよい。そして物自性を離れては存在が成立しな
 いと云のは、直接に存在の觀念そのものゝ根據を求めたものであり、相可相を離れて
 は存在が成立しないと云ふのは、個々の物——それは必ず有相である——に於て、そ
 れが如何にして個々特殊なものでありつゝ、而も存在であり得るかと云ふ點に視點
 の移つて來たものである。それで此の場合、相可相によつて成り立つて居る存在が、
 存在として成り立たなくなる爲には、可相である物自性が取り除かれ、ばよい。そ
 して物自性は已に物の生滅變化を根據にして否定されて居るのである。つまり存
 在を存在たらしめて縁起を不可能にして居る所以のものを物自性に於て見出し、縁
 起の可能なるために物から物自性を——生滅變化の事實を根據にして——否定し、

それによつて縁起を成立させると同時に存在を不成立ならしめると云ふ論義の立て方が龍樹の根本的方法になつて居るのである。それで相可相を離れては存在が成立しないと云ふ場合も、可相の概念を物自性の概念に導き返せば、第一の論義の方法によつて存在の不成立が證明される。然し可相の概念を物自性の概念に導き返さない限り、此の場合には別な證明の仕方が必要である。そして六種品ではその別な證明の仕方が用ひられるのである。即ち相と可相との結合せるものが物であつて、その結合が成り立たなければ物は成り立たない。それで相可相の結合が成り立ち得るかどうかを吟味する方法である。物に於て可相の要求を満たすものは物自性であつても、物自性と云ふ積極的な概念を用ひずに、何處までも相を中心に見て、「相」と「相せらるべきもの」と云ふ概念の範圍に止まつて考察するのである。此の考察は後に存在と法の問題を導く契機になつて来る。物自性が否定される方法によつて存在が不成立にされることから、存在が行に轉廻され、相可相の方法によつて存在が不成立にされることから、は「法」の世界が確立されると云ふ歸結が導かれるのである。それで六種品の相と可相とに關する論義は極めて重要な意味を持つて来る。相と可相との結合は如何にして不可能であるか。

四、相の不現行、可相の不可得

相と可相とが結び付き得ないとするれば物(存在)の觀念は成り立たなくなる。相可相の結び付き得ないことの論證は次の如く爲されて居る。

(一) 虚空相より前に虚空はない。(二) 相より前に物ははない。

相より前にあれば無相のものである。

(二) 何處に於ても何であつても物(存在)にして無相のものはない。

無相の物がなければ相は何處に現はれるか。

(三) 無相の物のうへにも有相の物のうへにも相の現行はない。

有相無相より別の場所にも相は現行しない。

(四) 相が現行しなければ可相は不可得である。

そして可相が不可得なるときは相もまた現はれることがない。

(五) それ故に可相なくまた相もない。

相と可相とを離れては物(存在)はまた實にあることがない。

最初に「虚空」の概念で問題が始められて居る。虚空は空間であるが、この場合は虚

空そのものが問題であるのではなく、單に「物」の一例に取られたものに過ぎない。第二偈ではすぐに「何處に於ても何であつても物にして……」として「物」の概念を用ひて、存在するもの一般の論義に移つて居る。この場合の「虚空」は花とか瓶とかと同様の一つの物としての意味に於て考へられて居るのであつて、空間と云ふ特殊な内容に於て考へられて居るのではない。存在するもの一般の一例として單に或る名詞が用ひられて居るに過ぎない。此のこと——或る名詞の用ひられたと云ふ——に就いては、存在するものは何であつても、好いが或る特殊なる何かではなければならぬと云ふことを指示して居ると云ふ點だけが注意されれば好いであらう。それで最初の一句「虚空相より前に虚空はない」は、花相より前に花はないと置き替へられても、少しも問題に變りのない句であつて、一般的に唯だ「相より前に物はない」と云ふ意味をあらはすのである。十二門論に此の箇所を再論するところでは象と馬が例に取られて居る。唯だ此處で記憶して置くべきことは、存在する何かは必ず「名」であらはれると云ふことである。このことは後に「法」の問題に導かれるときに必要になる。又存在するもの一般の例として取つたにしても、特に「虚空」を取つたことは別の方面から或る意味を持つて居る。そのことは補遺に於て考察するであらう。この箇所

では「虚空」の概念が「空間」としてのそれ自身の特殊な意味内容を離れて、單に存在するもの一般をあらはす意味に於て取り扱はれて居ると云ふことを特に注意することが必要である。

相と可相が結び付くとすれば如何なる仕方て結び付き得るか。

相と可相の概念は、有相の物に就いて「物の相」と相せられる物とを區別する考へを指示して居る。「物の相」は相である。「相せられる物」は常に凡ての相を離れて、唯だ相せられることを課せられて居るところの「相せらるべきもの(可相)」である。此の相せらるべきものに積極的な實體を與へれば物自性であるが、「相せらるべきもの」と云ふ概念そのものは、むしろそこまで行かないで、有相の物から相を取り除いた後に残る物、即ち「相せられる物」の方に結び付くのである。相に對する可相(相せらるべきもの)は、「物の相」に對する「相せられる物」のことである。それは凡ての相を離れて居る點からは、有相の物(salakṣaṇa-dhāva)に對して無相の物(alakṣaṇa-dhāva)と云はれ、所謂「相より前に有る物」である。そして物の相は、物の現はれてあるすがたであり、無相の物は現はれざるものである。若し物を相と、無相の物とに分解するなら、現はれるものは相

であつて、無相の物が現はれて來るのではない。無相の物は唯だ「在る」もので動くことの出來ないものである。無相の物を場所として其の上に相が現はれることによつて、相をもてる具體的な物が出來るのである。此の現はれることを「現行」(pravṛitti)と云ふ。言語上「現はれ出づること」を意味し、唯だ相のみに結び付く概念である。「無相の物のうへにも、有相の物のうへにも相の現行はない。有相無相より別の場所にも相は現行しない」と言ひあらはされて居る。即ち現行するものは必ず相であり、無相の物は相の現行のおこる場所としての意味を與へられるのである。相と可相とが結び付くことによつて物が成り立つのであるが、相と可相とが結び付く仕方は、可相相せらるべきものとして、の無相の物を場所として其の上に相の現行のおこることによる。之を具體的な例によつて見れば、一つの花に於て、色形、手觸り等を取り除いた後に殘る無相の花——勿論空間的大いさもない——が相せらるべきものとして存在し、その上に色や形が現行し、それによつて「相せらるべきもの」が相せられて花と云ふ物が出來ると考へるのである。此の現行がおこり得なければ相可相の結び付きは成り立たない。相の現行は、已に相をもてる物の上にも又其他の場所にも起り得ず、おこり得るとすれば無相の物の上に於てのみである。その爲には先づ無相

の物と云ふものが存在しなければならぬ。そして「相より前に有れば無相の物である。何處に於いても何であつても無相の物はない。無相の物がなければ相は何處に現はれるか」と云はれて居る。相を離れた「無相の物」と云ふものゝ存在を否定するのが龍樹の立場である。それは相以上に物を見ない立場である。十二門論では面白い例を擧げて、「有隻牙垂一鼻頭有三隆耳如箕脊彎弓腹大而垂尾端有毛四脚麤圓なることが象相で、是の相を離れて更に象の相を以て相すべきもの有ることなしとも云つて居る。物に於て相以上に何か有るやうに思ふのは、物存在の觀念そのものが要求するところのもの、即ち「有ること自體」が實體化されるからである。又個々の物に於いて物自性——花自性とか象自性とか——が相以上に加はつて居るやうに考へられるのは、そのものゝ「名」が實體化されるからである。因明の論理學では命題の主語を「自性」と云ふのであるが、物自性は主語としての「名」が實體化されたものである。それは假定されたもので存在するものではない。この假定が龍樹によつて取り除かれる。そして「相を離れて別に相を以て相すべき物」即ち無相の物と云ふ如きものが否定される。相以上に物が無いと云ふことは龍樹自身の立場として如何なる意味を持つて來るであらうか、それは最後に來る問題である。そして此處では、

無相の物を立てゝその上に相が現行すると考へる立場に對して、無相の物が否定されゝば、相の現行する場所がなくなり、現行が不可能になる。又相の現行が不可能になれば、相せらるべきものと云ふものが何處にもあり得なくなる。「相が現行しなければ可相は不可得である」と云はれて居る。不可得 (na upapadyate) とは「あり得べからず」の意味であるが、相には現行の概念が、可相には不可得の概念の結び付いて居るのは注意してよいことである。相は動くものであるが可相は動かぬものである。龍樹の論義は斯かる場合の概念の用ひ方に於て常に明晰である。そして又相せらるべきものがなければ相は尙現はれることが出来ない。それで「可相が不可得なら相も亦現はれることがない」と云はれ、随つて「それ故に相もなく可相もなく、相可相を離れては物存在もまた實にあることがない」と結ばれるのである。

之によつて存在不成立の論證が終つて居るが、之は如何なる歸結を導いて來るか。

五、六種品から導かれる問題

存在不成立の論證のすぐ後に、次のやうな一偈がそれを結ぶために置かれて居る。

○それ故に虚空は存在でもなく、非存在でもなく、また相でもなく可相でもない。

茲に再び虚空の概念が出て來たのは、最初に虚空の概念を取つて問題を始めたからである。之を考察の便宜のために「存在」として、より一般的な内容をもつ花の概念に置きなほして見る。そして「それ故に花は存在でもなく非存在でもなく、また相でもなく可相でもない」と云はれるとき、それならば花は何であるか。之が六種品に殘された問題になるのである、そして其處からは三つの重要な歸結が導かれて來る。

第一、存在が行に轉せられる。事實として花は有るものであり、又生じたものである。そして單に有ると考へられて居る限り相によつてのみ區別せられ得る物であるに過ぎないが、生じたと考へられるとき、生起の因縁として無限の過去と自然界の一切の存在出來事が働かなければならない。それ等の因縁が働いて一つの花が花として生まれ出づることが花の行である。因縁に働かれて生まれたることを云ふ點に即して見れば、生まれたる花は有爲出來事になるが、生まれ出づること其のことに即して見れば、生まれ出づることは花の行である。行は一切との相縁を中に含むで一物が一物と成ること、即ち縁起すること其のことである。存在としての花の相は斯かる行縁起を指示するものに他ならない。そして行縁起としての花は、最早や他に對する一ではなく、世界全體を具現することによつて一なるものである。花が花と

成ることによつて世界全體が成り立つのである。斯かる行縁起のすがたが存在の實相で、單なる存在は空である。然るに存在性が固執されば生起が成り立たないから、無相の花の上に色や形が現行して具體的な花が出来ると云ふ様なことを考へなければならなくなるであらう。斯かることは勿論説明の出来ないことである。存在するものから存在性が除かれれば、存在は行縁起に轉せられ、一つのものが一切に關聯し、一切が一つのものに具現されると云ふ世界が開かれて来る。六種品の最後に存在の立場を批判する次の如き一偈が置かれて居る。

○諸物の存在性と非存在性を見るところの智慧淺き者、かれ等は安穩なる、可見の寂滅を見ない。(第八偈)

可見は相である。物の存在性を固執する者は有ることを見て、それ以上に有ることの因縁を見ない。其處では唯だ有り方のみが問はれる。存在性を見る者は、物が見らるべき可見觸れらるべき差別の相を超えることが出来ない。縁起に入るとき人は始めて差別を超えて全體に觸れ、其等では可見の差別相はおのづから寂滅するのである。

第二、存在が意識に攝せられる。存在の立場では物と相のみが問題になるが、此の場合龍樹は、相を離れて別に相を以て相すべき「無相の物」と云ふものを否定する。相以上に物の存在を見ないのである。そして相は物に於て意識内容として與へられる部分で、相以上に考へられた無相の物が否定されれば、意識内容としての相のみが残る。そのときは最早や相と云ふ概念も不必要である。相の概念そのものは、自己自身の性質によつて——即ち意識から離れて——存在する物の「すがた」「かたち」として、概念上意識から離れて物に從屬する。唯だ具體的に存在する物に於て、その相と云はるゝ如き部分が意識内容として與へられて居るのである。それで自己自身の性質によつて有る物——無相の物——が否定されれば、隨つて相の概念もなくなり、後には唯だ意識内容のみが残る。つまり物全體が——花に於ては色彩感觸は固より其の空間的大いさも——意識内容に返されるのである。茲に後に唯識哲學の發展する充分な基礎が與へられる。又龍樹に於ても後期の作である智度論には、隨所に一切は唯心とか、唯だ心行のみありとか言ふ言葉があらはれて居る。

第三、法が存在から區別される。個々の物が存在として不成立になる時、後に其の

ものゝ「名」が残る。此の名が法であると云はれるのである。存在としての花は意識内容であるが、我々が花を見る時、直接に意識内容として與へられて居るのは花ではなくして色である。然し又直接に意識されるのは却つて花であつて、色の感覺に即して花が意識されて居ることも考へられよう。具體的な意識經驗に於ては、單なる感覺は却つて抽象されたもので、すべての感覺内容——色や手觸り——が常に何かのと云ふ意味に統一されて意識されて居るのが事實であるやうに思はれる。それは我々の意識が思惟を離れては成り立たないからであらう。此のことは佛敎の哲學で一般に注意されて居る。即ち六識の説に於て、眼耳鼻舌身の五識は感覺的意識であり、第六の「意の識」は、意 (manas) が「思惟」を意味して、思惟意識である。そして第六意識は單獨に行することが出来るが、前五識は單獨に行することが出来ないで、必ず第六意識を伴はねばならないと云ふのである。即ち單純な色の知覺に於てもそこに感覺と共に思惟がはたらいて居るのである。そして感覺作用前五根の對象(境)をなすのが、色聲香味觸の五境で、思惟作用意根の對衆境をなすのが「法」である。之は佛敎の敎理一般に通ずる根本的な定義である。之を記憶して、今經驗して居る花の意識を考へて見れば、直接に見て居るのは色であつて、その色の知覺そのものが已に思惟を

含むで成り立ち、言ひ替へれば單なる感覺内容が、この色と云ふ意味によつて統一されることによつて具體的な色の意識として成り立ち、其の色の意識が更により根源的にはこの花——今見て居る特殊な一つの——と云ふ意味によつて統一され、それが更に花一般と云ふ意味によつて統一されることによつて、今經驗せられる具體的な「花の意識」が成り立つて居ると考へられるであらう。意識は必ず意味 (artha 義) によつて統一されて居て、此の意味が法であり、それが意識の中に於て意根の境として働くのである。そしてそれは個々の物の「名」に他ならない。花に於て物としての花は意識内容であり、「花」と云ふ名が意味として意識内容を統一することによつて、具體的な花の意識が成り立つと考へられよう。我々の一切の經驗に於て、經驗の成立と同時にそこに「名」が働いて居ると考へられる。それで佛敎の敎理では此の「名」が特に重要な意味を以て扱はれるのである。物自性と云ふも畢竟「名」の實體化されたものに他ならない。能樹の注意したことは「名」が物自性をあらはすのではなく、「義意味」をあらはすと云ふことである。そして意根の境としての「法」と「名」とを結び付けるのである。それは「法」は名字にして名字は義をあらはす、又は「名字」は法である」と云ふ形で言ひあらはされて居る。これによつて存在が意識内容に返されると共に、個々の物

の「名」が法として存在から區別されて思惟の對象界に置かれるのである。そして此のことは同時に「法」が存在界に對してどう働くかをも明かにするのである。六種品の論義は斯かる「存在と法」の問題を導く契機をなすところに重要な意味をもつて居る。これに就いては更に典據を擧げて詳しく考察し度いと思ふ。

有無の見を轉ずることから導かれて來る以上三つの歸結は龍樹哲學の最も本質的な内容を形づくるのである。そして存在するものゝ中、緣起の把握し得る物的存在と心的存在(想念、感受等)とから存在性が否定され、それ等の存在に就ては以上三つの歸結の凡てが當てはまり、緣起の把握し得ない存在、例へば虚空の如きから存在が否定され、ば意識内容と法とに返され、單に概念を實體化して存在と考へられた存在、例へば因果とか緣起とかから存在性が否定され、ば、それは唯だ「法」としてのみ考へらるべきものになるのである。そして凡ての「ことば」は法である。(第一章完)

補遺、虚空の概念の取られたことに就いて。

物から存在性を否定すると云ふことが、結局のところ六種品の根本的な問題になつて居る。そして物から存在性を否定する爲に、龍樹では根本的に二つの方

法が用ひられて居て、第一は生滅變化を根據にして物自性を否定する仕方であり、第二は六種品にあらはれる如く、相相の結合の不可能から存在の觀念の不成立に導くと云ふ仕方である。此のことを先づ記憶して置いて六種品の本文を見るとき、最初に「虚空」の概念を以て論議が始められて居る。それは一方では一つの物と考へられた虚空と云ふ存在から存在性を否定しようとするものであるが、其の否定の方法には、單に虚空のみならず、一般の物に就いて其の存在性を否定し得る如き方法が用ひられて居る。又本文で、虚空の概念で問題を始めながらすぐに「何處に於ても何であつても」として、「物」の概念に置き替へて問題を進めて居るのを見ても、虚空なる物の存在性否定に即して、物一般の存在性を否定しようとして居ることが分かる。随つて此の場合の「虚空」は空間と云ふそれ自身の意味は失つて、他の如何なる名詞に置き替へられても問題上に少しも差支ない如き意味に於て、即ち物一般の一つの例として取り扱はれて居るのである。それならば此處に虚空の概念の用ひられたことは問題の内容に對して全く偶然的であるかと云へば、さうではないであらう。では何か必然的な關係があるとするればどう云ふ關係であるか。それに就いて第一に考へられるのは六

種品と云ふ品名である。それは其の名の示す如く「六種」のこゝを取り扱ふ筈である。六種は普通六界と譯され、地水火風の四大と「虚空」と「識」とが、一群にまとめられて「界」と云ふ意味に於て考へられたものである。そして此の六界が何う云ふ取り扱ひ方をされるかと云へば、存在物と考へられた六界から存在性を否定する云ふ取り扱ひ方をされる。その場合に六界の一々の名稱を擧げて同じ論議を繰り返す代りに、「余五同虚空」として、虚空を以て他を代表させたのである。それで六種品と云ふ品名から見れば「虚空」の概念の用ひられて居るのは當然のことである。然し之は問題の内容そのものに對して必然的な關係をもつことにはならない。それを見出すには更に、相可相の結合の不可能なことから物の存在性を否定すると云ふ論證の仕方そのものと、一つの存在物としての虚空の、他の物と異つた特殊な性質とが如何なる關係を持つか、考へられねばならない。茲に物の存在性を否定する龍樹の二つの方法を比較して見るに、生滅變化によつて物自性を否定する第一の方法は、生滅變化の把握し得る如き存在に對して、なければ當てはまらないが、第二の相可相の方法は存在するもの一般に當てはまる。若し生滅變化の把握し得ない如き存在があるとすれば、其の物の

存在性を否定するためには唯だ第二の方法のみが用ひられねばならない。そして虚空は斯かる存在の一つである。相可相の方法そのものは虚空のみならず一般の存在に對して用ひられ得るが、虚空と云ふ存在を否定するには此の方法でなければならぬ。之によつて六種品の問題の内容そのもの——存在一般から存在性を否定すると云ふ——と、虚空の概念とが不即不離の關係にあることが理解できると思ふ。又物自性を否定する方法が龍樹では根本的なものになつて居るが、特に六界と云ふ如き存在の存在性を否定しようとしたとき、新たな方法が見出されて來たものとも考へられよう。そして六種品の持つ意義は、それが六界なるものゝ存在性を否定して居ると云ふ點に在るのではなく、虚空の概念に結び付くことによつて、存在一般の存在性を否定するものとしての相可相の方法の特徴が愈々明かになつて居ると云ふ點に在るのである。隨つて六種品の問題の内容そのものに視點を置くときは、虚空又は六界がその特殊な意味に於て何であるかと云ふことは全く問はれなくて宜いことである。

(昭和三年三月)